

「黒衣の僧」(チエーホフ)

哲學專攻の學士アンドレイは學問に勵む餘り神經を病み、田舎で療養する事にした。田舎には育ての親の園藝家エゴールとその娘ターニヤがゐて、彼を非凡な男として甚く誇りに思つてゐた。が、田舎でも彼は書物と研究に没頭して前と變らぬ神經質な日々を送るのであつた。

そんな或日、アンドレイは昔何かで知つた傳説に登場する「黒衣の僧」の幻影を見る。傳説によれば、件の僧は千年前に中東の沙漠に蜃氣樓となつて出現し、千年後の今日再びその姿を現すといふのだが、それが自分に見えたといふ事實に彼は「非常な愉快を覺え」、その顔には「輝かしい、靈感にみち」た表情が現れた。見えたのは神經の病のせみかとの不安も萌すが、「何か途方もなく大きい」出來事を望んでゐた彼はそんな不安は打消して了ふ。

そして或晩、黒衣の僧が再び現れて彼に云ふ、天才にして神に選ばれし者たる君は「平々凡々たる、いはゆる群衆」とは異り、「永遠の眞實に奉仕」せねばならぬ。この言葉はアンドレイの「存在全體をくすぐつた」。「何といふ仕合せな運命だらう！」

やがて彼はエゴールに望まれてターニヤと結ばれるが、眠れぬ夜、ふと見ると、黒衣の僧が

寢室の肘掛椅子に坐つてゐる。二人は熱心に語り合ふ。妻が目を覺し「驚きと恐怖を浮かべて」夫を見る。肘掛椅子に話しかけ「身ぶりをまじへたり笑つたり」する夫の「目はぎらぎらと輝き、笑ひ聲には何か奇妙な響があつた」。

狂氣を確信した妻達に請はれてアンドレイは治療を受け、黒衣の僧を見る事もなくなる。だが、以前の「喜びに満ちた」表情を全く失ひ、妻と義父に激しく食つて掛る様になる。自分はこんな「月並な人間になつて、生きるのが大儀」で仕方がない、「ああ、なんと残酷な事をしてくれたのか」。

彼は妻を捨て別の女と暮し、やがて大學の講座を擔當する身となるが、啖血して療養してゐると、義父の死を知らせる妻の憎々しげな手紙が届く。アンドレイは妻達への酷い仕打を悔やみ、四十近くなつて漸く「平凡な教授」となる爲に精神を病んだ越し方を苦々しく振返り、己れが「凡人」たる事を明確に自覺し、「人は誰でもあるがままの姿で満足せねばならぬ」とつくづく思ふ。

然るに、またもや黒衣の僧が現れ、君は天才なのだといふ俺の言葉をどうして信じなかつた

のだ、と責める。アンドレイはやはり自分は天才だったのだと思つて「無限の幸福」を覚え、口を利かうとすると、口から血が溢れて昏倒し、「幸福さうな微笑」を浮べて息絶える。

怪しげな理想論や使命感に取憑かれた凡庸で無能な知識人の自惚れを、チェーホフは様々な作品で痛烈に揶揄してゐるが、明らかにアンドレイもその種の似非知識人の一人である。けれども、チェーホフは同時に、内なるアンドレイの存在をも痛切に自覺してゐた。トロワイヤの「チエーホフ傳」（村上香住子譯）によれば、彼は實際に黒衣の僧を夢に見て、その「恐ろしい夢」に激しく心を掻き亂され、悪夢を拂拭すべくこの作品を書いたといふ。アンドレイの狂態は他人事ではなかつたのだ。アンドレイは折角凡人の自覺に至つても、最後には又心地よい幻想に縋りつく。實に、人間、己が「あるがままの姿」を直視する程難しい事は無い。T・S・エリオットの云つた様に、「自分の事をよく思ひたいといふ欲望ほど根絶し難いものはない」からだ。しかし、やはりトロワイヤによれば、チェーホフは又、「われわれが、ありのままの自分を見出したならば、人間はずつと素晴らしくなるだらう」と手帖に記してもゐたといふ。彼の格闘の本質を凝縮した言葉だと思ふ。（池田健太郎譯、チェーホフ全集九、中央公論社）